

AALA NEWS

Asian American Literature Association, Japan
December 2021 No.59

未だに新型コロナウイルスの脅威は収まる気配がなく不安な日々が続いていますが、会員の皆様におかれましてはいかがお過ごしでしょうか。この AALA News 第 59 号では、Zoom でのウェブ開催となった 2021 年度（第 29 回）AALA フォーラムのプログラム、発表要旨、総会報告を掲載しております。フォーラムの感想は洪育生先生にご執筆いただきました。また、「おすすめの研究ツール」と題したエッセイ特集を組んでおります。ご投稿いただいた 3 名のエッセイはどれも興味深いもので、どのツールも自分の研究・教育に役立てたいものばかりです。皆様も「これが便利だよ！」と積極的に広めたいツールがありましたら、ぜひお教えてください。このような情報共有によって会員同士で切磋琢磨し、学会（界）の発展に繋がることを願っております。（文責：渡邊真理香）

第 29 回 AALA フォーラム

<プログラム>

2021 年 9 月 19 日（日） ウェブ開催（Zoom 使用）

12:15~13:00 総会

13:00~14:30 研究発表

仁平千香子（山口大学）

二世の贖罪意識についての考察——John Okada と森崎和江の比較から
岸野英美（近畿大学）

水資源の危機——Rita Wong の *Undercurrent* を読む

14:30~18:00 シンポジウム

アジア系アメリカ文学の新世紀——21 世紀初頭のピューリッツァ賞・全米図書賞受賞作
／ファイナリストを中心に

司会：古木圭子（奈良大学）

発表：

麻生享志（早稲田大学）

ピューリッツァ賞への道——Viet Thanh Nguyen, *The Sympathizer*における「ヴェトナム」表象とアメリカ文学史

牧野理英（日本大学）

「島」と日系アメリカ——*I Hotel* (2010)を読む

藤井爽（近畿大学）

成功物語としての Min Jin Lee, *Pachinko*

加藤有佳織（慶応義塾大学）

容赦なく語ること——Hanya Yanagihara の小説における暴力の表象

志賀俊介（成蹊大学）

故郷の影とともに——Jhumpa Lahiri, *The Lowland*にみるインド系移民のアメリカ像

<研究発表概要>

二世の贖罪意識についての考察——John Okada と森崎和江の比較から

仁平千香子（山口大学）

John Okada, *No-No Boy*には日系アメリカ人二世たちが経験した差別や、家族や共同体の分断が描かれているが、作品を通して強調されるのは主人公の「ノーノー・ボーイ」としての贖罪意識である。忠誠審査で従軍を拒否した彼らは、終戦後もなおアメリカ人社会からも日系人社会からも疎外感を感じ続け、Ichiro は自分の犯した「罪」について自問自答を繰り返す。そこには「ノーノー・ボーイ」たちの決断がそもそも「罪」であったのか、またそれは個人が背負いまた償うことが可能な種類の「罪」であったのか、という問いを議論する空間はほぼ与えられない。

一方で、類似の贖罪意識に苛まれた日系人二世が外地と呼ばれた地域にも存在した。朝鮮半島生まれの森崎和江は、戦後の作家人生を通して日本人が朝鮮で犯した「罪」を引き受けるといふ強い使命感をもって活動した。本発表では、John Okada と森崎和江の作品の比較を通して、日系アメリカ人二世と外地二世が経験した疎外感と贖罪意識について考察する。

水資源の危機——Rita Wong の *Undercurrent* を読む

岸野英美 (近畿大学)

2008年に Dorothy Livesay Poetry Prize を、2011年に Canada Reads Poetry を受賞した中国系カナダ人 Rita Wong は現在、最も注目されているカナダの環境作家(詩人)の一人である。Wong は2007年にフォーラム Protect Our Sacred Water へ招待されたことをきっかけに「水」をめぐる問題に関心を持ち、のちにカナダの作家や芸術家が立ち上げる Downstream: A Poetics of Water (a research-creation project)に参加する。そして、本プロジェクトを通して執筆した多くの作品を詩集 *Undercurrent* にまとめ、2015年に出版する。*Undercurrent*には、カナダ西海岸や、太平洋、そこに流入するフレーザー川(BC州)の汚染問題が、Wong の個人的・文化的な経験と交差しながら描かれている。本発表では、太平洋の漂流ゴミやフレーザー川の汚染状況を確認した上で、人為的活動によってもたらされた水の汚染を Wong がどのように描き、私たち人間に警鐘を鳴らしているかを探っていきたい。

<シンポジウム概要>

Maxing Hong Kingston, Amy Tan, David Henry Hwang など、メインストリームのアメリカ文学に参入してきた作家たちは、かつてアジア系アメリカ文学においては「少数派である」と捉えられていた。しかし近年、全米図書賞やピューリッツァ賞の受賞者、あるいはファイナリストとなっているアジア系作家が多くみられるようになり、アジア系アメリカ文学は、メインストリームの文学界に進出してきている。Charles Yu の *Interior Chinatown* が2020年に全米図書賞を受賞したことも記憶に新しいことだろう。そのような状況に鑑みると、アジア系アメリカ文学が「マイノリティ文学」であった時代は終わりを告げたかのようにさえ思われる。そこで本シンポジウムでは、Viet Thanh Nguyen, Karen Tei Yamashita, Min Jin Lee, Hanya Yanagihara の作品を中心に、「マイノリティ文学」としてのパーспекティブを超える新たな視座を、アジア系アメリカ文学研究に提供することを試みたい。(文責:古木圭子)

ピューリッツァ賞への道——Viet Thanh Nguyen, *The Sympathizer* における「ヴェトナム」表象とアメリカ文学史

麻生享志 (早稲田大学)

小説 *The Sympathizer* で、ヴェトナム系作家として初めてピューリッツァ賞を受賞した Viet Than Nguyen。その執筆において意図したことは、白人読者ではなく、ヴェトナム

ム系読者を対象に小説を書くことだったという。そこにはアメリカ文学の歴史のなかで、いわゆるエスニック系作家が置かれてきた微妙な立場があったことを理解しなければならない。すなわち、いかに高らかに抗議や抵抗の声を上げ自らのアイデンティティを主張しようとも、エスニック系作家を読むのは文壇の八割以上を占めるといわれる白人読者だという点である。おのずとその声は中和され、妥協や和解を目指すことになる。

本発表では、エスニック系作家が置かれてきたアメリカの文化・社会的環境のなかで、ウェンがヴェトナム系作家として生の声をいかに読者へ届けようとしたのかを、作品における「ヴェトナム」表象のあり方から読み解く。

「島」と日系アメリカ——*I Hotel* (2010) を読む

牧野理英 (日本大学)

Karen Tei Yamashita が長編小説 *I Hotel* を 2010 年に著し、2008 年に今福龍太が『群島』、そして歴史家の Gary Okihiro が *Island World* を著していた事態は 2000 年代初頭の作家や歴史研究者が「島」という概念を、文化人類学的な日系の共振の場とみていたことになる。この「島」には日系の閉塞的資質と共に、それゆえに他の民族との共振を可能にする相反する要素をみることができる。本発表では *I Hotel* の第 6 章を中心に、日系性という民族的資質が島という閉塞的概念でとらえられ、それが同時に共振という情動によって他のエスニシティと交錯する瞬間を分析していきたい。具体的には、この章のテーマであるアメリカ国家の創造説である *The Turtle Island*, そして日系収容所であるトゥーリレイクの伝説を踏まえ、アメリカにおける日系性の諸相を考察していく。またこの小説が National Book Award のファイナリストとなりながらもそれを逃したという点にも着目し、Yamashita 作品の独創性にせまりたい。

成功物語としての Min Jin Lee, *Pachinko*

藤井爽 (近畿大学)

Min Jin Lee, *Pachinko* は主に韓国と日本における 4 世代にわたるコリアンの家族を追った大河小説で、小説としては Lee の第 2 作目に当たる。2017 年に出版されると、同年のニューヨーク・タイムズ誌のトップ・テンの本に数えられ、全米図書賞の最終候補に残った。2019 年にオバマ元大統領が自身の読書リストに入れた作品としても知られ、2020 年までにはアメリカで 100 万部以上を売り上げ、今年からはアップルのストリーミングサービスでドラマ版が配信開始の予定である。ここまで注目を集めたのは、本作が移民文学であるだけでなく成功物語の枠にも入るからではないだろうか。韓国の文化が急速に世界

に広まりつつある一方、コリアンが主人公のメインストリームになった物語が決して多くはない中で、こうした成功物語を提示することが持つ意味を、コリアンや日本人の登場人物の描写や個々の人物の物語などから読み解いてみたい。

容赦なく語ること——Hanya Yanagihara の小説における暴力の表象

加藤有佳織（慶應義塾大学）

1950年から毎年アメリカ人作家による「最良」の作品を選ぶ全米図書賞では、2010と11年に Karen Tei Yamashita の *I Hotel* や Julie Otsuka の *The Buddha in the Attic* が小説部門最終候補作となり、13年に Cynthia Kadohata の *The Thing about Luck* が児童文学部門で受賞している。Kadohata はさらに、19年に *A Place to Belong* が児童文学部門候補作となった。こうした作品と比べると、15年の小説部門最終候補作となった Hanya Yanagihara の *A Little Life* は、その題材において異なっている。アメリカのなかで日系やアジア系として生きることやその意味を描出するよりも、出自がどこまでも曖昧な Jude St. Francis という人物と彼の友人たちをとおして、説明不可能な暴力をいかに表象するか、男性同士の関係をどのように描くかに関心があるように見える。この関心を共有する13年の小説 *The People in the Trees* とともに、Yanagihara 小説における容赦のない語りを考察する。

故郷の影とともに——Jhumpa Lahiri, *The Lowland* にみるインド系移民のアメリカ像

志賀俊介（成蹊大学）

ピューリッツァ賞を受賞した1999年発表の短編集 *Interpreter of Maladies* 以来、Jhumpa Lahiri はインドとアメリカの間で属するべき場所を求め行き惑うインド系移民の物語を紡いできた。しかしながら、彼女自身はイギリスで生まれ幼少期にアメリカへ渡っているため、一部の批評家が指摘するように彼女が描くインドは多分にアメリカ的なステロタイプを含んでいることは否めなかった。

その彼女がインドで1960年代後半から展開されたナクサライト運動を題材にしたのが、2013年に発表され、全米図書賞の最終選考に残った長編 *The Lowland* である。ナクサライト運動に従事する弟とアメリカへ渡る兄を中心に展開するこの物語において、インドは単なる背景ではなく、アメリカと並び鮮明な像をもつ舞台である。二人の兄弟が象徴するインドとアメリカの分かちがたい関係性は、移民にとって故郷は遠ざかる過去の土地になりえないことを示唆する。本発表では、本作品を貫く越境性に注目しつつ、全米図書賞の最終候補となった意義についても考察する。

<フォーラム参加記>

大会に参加した感想

洪 育生 Ikuo106@aol.com

1 マイノリティー文学の解釈

マイノリティー文学には二義的な意味がある。一つは差別される少数派研究であり、もう一つは文学研究の一領域である。マイノリティー文学を超えるとは、小さな文学研究の一領域を超えて、普遍的な、世界的な領域に至る優れた研究・作品を生み出すという意味がある。また、別の見地から、同じアジア系作家でも、アジア系の事を書く作家、またそれ以外の一般の事柄をテーマにする作家がいる。ユダヤ系作家において、ユダヤ性を書く作家と、それ以外の事をテーマにした作家がいたのと同様である。現在のコロナウイルス禍では、それが中国で生まれた事で、アジア人全体が暴力を受けている。アジア人に対する差別は顕著に表れている。マイノリティー文学研究としてのアジア系アメリカ文学研究の必要性を感じる。少数派作家が有名になってマイノリティーについて言及しなくなり大成するというのも一つの在り方であるが、マイノリティーが最後までマイノリティー研究をすることもあり方の一つである。両方の考え方を尊重したい。

2 森崎和江という人についてはあまり知らなかった。筑豊炭田については林えいだいが詳しく語っていた。新しい知識が入ってきた。彼女が書いた『からゆきさん』はあまり恥の部分なので語られないが、数千人以上の日本人女性が苦しい時代を過ごした歴史があったのだと改めて思った。

3 在日とアジア系は面白い関係性のある研究対象のように思える。

*Pachinko*では、コリアンズを肯定的に日本人を否定的に描いているという説明があった。多くの在日に聞き取りをしているので、必然的に差別される側からの発想となっているようだ。日本におけるコリアンズに対する状況を世界に知らしめる事を使命と捉えている様子が窺える。藤井氏のコメント、「在日を評価して、日本人を否定的に描いている」はこのような状況から生まれているのではないか。日本のサイドからは恥部の露呈となるので、あまり嬉しくない事である。アメリカ人にとって日韓関係は馴染みがなく、在日の状況も馴染みがないが彼等にとっては興味深い内容のようである。この作品は商業的に大成功しているので、作者の使命は果たせたようである。日韓関係最悪の中、日本では売り上げは伸びないし、厳しい評価がなされると推測できる。政治が文学にもたらす影響も憂慮される。

4 世界はナショナリズムへと進んでいるので、マイノリティーやアジア系にとって厳しい状況である。逆に言うと戦いやすい時代であるともいえる。ポピュリズムを政治利用す

る政治家が増えている。自国の利益優先主義を貫く姿勢が見える。

5 麻生氏のコメントで「読者の多くは白人」というのはいつも大切な視点である。本の売れ行きや、様々な賞への白人の影響は無視できない。しかし、アメリカでのアジア系文学の出発点である『アイー』はアジア人によるアジア人の作品のように思われる。賞を取るといったことはどんな意味があるのか。『アイー』が紹介した作品は賞を受賞していない秀作が多かったのでは。賞が求めるものと、質の良い文学とは一致しない部分もあるのではないか。しかし、今回の発表作品はどれも面白かったし、ノーベル賞を取った作品はいつも評価される。

6 日本では流行らないアジア系の作品。発行部数は多くなく、絶版する本が多い。研究者には受けが良いかもしれないが、大衆受けしない。一流どころより撮られた映画などがもっと出回り、ヒットすれば一般化するかもしれない。大衆はアメリカのアジア人を知らないし、知ろうともしない。影の部分に光を当てるのは難しい。

総会報告

2021年度 AALA 総会 議事録

1. 報告事項

(1)2020年度(2020年4月1日～2021年3月31日)活動報告

①2021年3月例会のみウェブ開催。研究発表者および発表レジュメは AALA News No. 58 に掲載済み。

②新型コロナウイルス感染症のため、第28回 AALA フォーラムは AALA Journal No.26 での誌上開催となった。

③2020年12月31日付けで AALA Journal No.26 を発行。2020年度の AALA フォーラムを特集した。

(2)2020年度会計報告

2. 審議事項

(1)2021年度(2021年4月1日～2022年3月31日)予算案

(2)2021～2022年度役員を選出と役割分担:役員は全員留任

2021年度役員・役割分担(敬称略)

役員(50音順)

東京地区: 麻生享志、池野みさお、稲木妙子、河原崎やす子、小林富久子、寺澤由紀子、原恵理子、牧野理英

中部地区: 小林純子、長畑明利、村山瑞穂

関西地区： 荘中孝之、野崎京子、桧原美恵、深井美智子、古木圭子、松本ユキ、前田悦子、元山千歳、山口知子、山本秀行

中四国・九州地区： 風早由佳、前田一平、吉田美津、渡邊真理香 計 25名

役割分担

顧問： 植木照代

会長： 山本秀行

事務局： 古木圭子(事務局長)、深井美智子(会計・名簿)、渡邊真理香(事務局長補佐、例会案内・ホームページ・国内外広報)

例会企画 関西地区： 山本、古木

東京地区： 牧野

中部地区： 村山

*各地区の例会企画担当者が提案

(3) 第30回 AALA フォーラム(2022年度)

開催場所: zoom あるいは対面未定 (東京役員が中心となって企画)

開催日時: 2022年9月

総合テーマ: 未定

(4) 2021年～2022年の AALA 活動予定

①例会企画: 2021年11月(中止)

2022年1月(中止)、3月(開催予定)、5月(未定)、7月(未定)、11月(未定)

実施および実施方法に関しては未定。ただし発表希望者は随時募集

② *AALA Journal* No. 27 担当: 古木圭子 2022年1月頃発行予定

③ *AALA News* No. 59 担当: 渡邊真理香 2021年12月末発行予定

④ *AALA News* No. 60 担当: 池野みさお 2022年6月末発行予定

2021年度の例会発表者の報告と第30回 AALA フォーラム・プログラムの予告

(5) 今後の活動予定

① *AALA Journal* No. 27 2022年1月頃発送予定

(6) その他

①今後の例会・フォーラムのウェブ開催など

②例会のお知らせや *AALA News* のウェブ化。メールリンクと併用し変更の方向へ

③2023年度(2023年4月1日～)以降の役員の役割担当については2022年度の総会までに検討して、総会にて決定される。

④ *AALA Journal* 掲載について

1) 役員体制、あるいは事務局体制を明記する。

2) 「自著、発表論文」のコーナーを会員の活動を載せる。不定期掲載。原稿の募集方法や様式については後日決定する。

3) 掲載論文には英文 abstract を付ける。ただし、投稿規則の変更が必要のため来年度以降の実施。

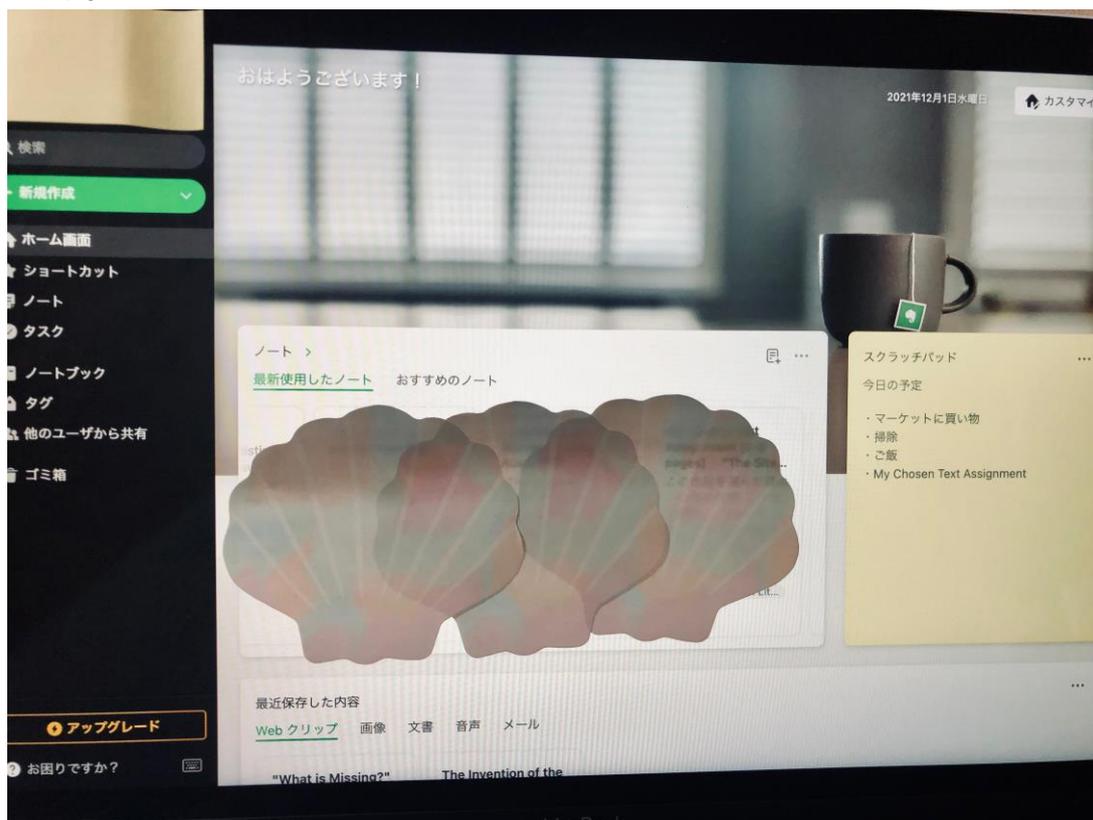
エッセイ特集「おすすめの研究ツール」

授業・論文執筆等で使用しているツールについて

早川真理子(名古屋大学[院])

私自身、これまで、紙のノートに授業やレポート構想のメモを取り、紙に印刷された本を読むなど多くの場面で紙媒体を好んで使用してきましたが、この頃、少しずつコンピューター上に移行しつつあります。というのも、今年の9月から始まったオレゴン大学留学のための渡米をきっかけに、色々なことをパソコン一つで管理できたらと思ったためです。実際には、パソコンのみの生活とはいかず、紙のノートや資料と併用しながらの日々を送っています。こちらの英文学科の先生方も、環境問題に配慮しつつ、授業のためにコンピューター上にアップロードされた資料は、印刷し、下線やメモを取りながら読んでいく方法を推奨しています。そのような中で、まだ使用歴は浅いですが、授業や論文執筆、資料や予定管理において便利だなと感じる、Evernote と Canvas という二つのツールに出会いましたので、ご紹介させていただきます。

一つ目の Evernote は、メモを取るためのアプリケーションで、あらゆる目的で使用することができます。まずノートを開くと、授業ノート形式や論文執筆のための形式、To Do リスト形式など様々なテンプレートが登場します。そのため、それらを参考にして論文やレポートを構想することができます。実際に私も、授業での論文作成時等に少々参考にして、蛍光マーカー機能なども使用しながら内容をまとめています。また、気になる Web ページをワンクリックで Evernote 内に貼り付けることができ、タグを付けてまとめることも可能であるため、資料管理に便利なツールでもあります。



二つ目の Canvas は、主にアメリカの大学で使用されている授業・学習管理のツールで、日本の大学の学生ポータルシステムのような存在です。アップロードされた資料の確認、課題の提出、成績の確認などができ、先生方と学生の方々とコミュニケーション手段の一つとなっています。私にとっては特に、提出物の予定管理に便利だなと感じています。Canvas 内のダッシュボードページには、毎日の課題が授業ごとに色分けされ大きく提示されているため、どの課題をいつまでに提出すれば良いかが一目で分かります。また、Canvas 上で課題を提出すると、その直後、紙吹雪と共に、トロフィーやパンダの画像が画面の上部から降り注ぎます。その画面をモチベーションの一つにしている私のような学生も決して少なくないはずです。

このように、現在使用しているツールについて、後半は「研究ツール」というテーマからずれてしまいましたが、学生の視点から紹介をさせていただきました。どちらもまだ使用し始めたばかりですので、ゆっくりと経過を観察していこうと思います。

オンラインによる卒論指導と校正ツールの活用

松本ユキ(近畿大学)

自分で書いた文章を校閲することは、とても難しい。口頭発表の原稿や論文をチェックする際には、悪魔の質問を考えるよう、大学院時代の指導教員にアドバイスされたことを思い出す。他の人が読んだときにどう思うか、誰が読んでも分かりやすい文章になっているか、自分の書いたものを他人の目を通して、読む人の立場に立って見つめ直す必要がある。ところが、どんなに客観的に厳しい目で自分の論文をチェックしようとしても、自分に甘くなりがちで、自らの誤りには気がつかないのが人間である。そんなとき、実際に自分の原稿を人に読んでもらい、アドバイスをもらうことが望ましいのだが、なかなかそうもいかない。最も気軽に尋ねることのできる相手は、おそらく AI ではないだろうか？

数年前、同僚の教員に勧められ、Grammarly という校正ツールを使ってみることにした。文法やスペル等のミスを検知する AI の能力は、思った以上に優れたもので、非常に驚いた。自分の書いた学会のプロポーザルを試しに Grammarly にかけてみると、MSWord や Google Document では検知できなかったエラーも発見することができた。特に日本人が普段あまり意識することのない単数と複数の区別、主語と動詞の一致、冠詞のチョイスについては、英文を書くときに間違いが出やすいが、AI がある程度正確な判断を下してくれる。自分の文章を校正ツールにかけると、自分がどんな間違いをしがちなのかを把握することができ、どうすればより正確な文章を書くことができるのか、AI からヒントを得ることができる。

学生の提出した卒論を MSWord や Google Document の校正ツールで確認すると、多くの青線や赤線が引かれている。私の学生時代に比べるとスペルや文法等の細かい誤りを検知する AI の性能は格段にアップしており、下線部分を確認すると、どこが誤っているのか説明が出て、どう直せばいいのか提案まで表示される。ところが、学生たちは下線部分に手をつけることなく、書き直しが必要とされる箇所をそのままにして提出してくる。なぜだろうか？校正ツールの存在を知らないから？AI の指摘や提案が正しいかどうか判断しかねるから？AI からヒントを得るのはズルいと考えているから？

ある学生の卒論で、“As Gogol grows up, he comes to have conflicts with parents.”という表現を試しに Grammarly にかけると、文法上のミスを検出し、parents の前に his を入れることを提案した。同じ学生の論文で、“I would like to focus on Gogol and Moushumi, who is an Indian American.”という一文があり、この場合も Grammarly は明らかな文法上のミスを検出し、is を are に、Indian American を Indian Americans と複数にするよう提案をした。これらのケースは単純な文法上のミスで、AI の提案を受け入れるか、どう書き換えるか、学生であっても容易に判断することができる。

しかしながら、書き手が言葉を複数形にするのは数を統一するだけでなく、また別の意味合いも含まれてくる可能性がある。「アジア系アメリカ人」と英語で表記するとき、それを複数にするのは、「アジア系アメリカ人」と言っても多様であることを表現するためだ。Asian-American、Asian/American、Asian Americans 等、どの表現を選ぶのかを判断するのは書き手である。AI がこのような書き手の意図を理解することは可能なのだろうか？

確かに細かい文法上の誤りやスペルミスなどについては、AI が膨大なデータから最善のものを導き出してくれる。ところが、AI には学生が伝えたい内容を推し量る能力はあまり期待できない。学生と直接やりとりをし、考えを確認したうえで、修正案を提示することができるのは、人間だけである。

コロナ禍の大学教育においては、対面授業ができない状況に対応するため、オンライン学習を取り入れる選択肢が増えた。昨年度そして今年度は、コロナ禍でほとんどの授業がオンラインでの実施となってしまったため、Zoom、Google Classroom、Microsoft365、Slack など、様々なメディアを活用することとなった。特に卒論指導において、このようなメディアは多いに役に立った。現代を生きる私たちには、様々なアプリケーションを時と場合に応じて使い分ける能力が必要とされている。コロナ禍で大躍進した将棋のプロ棋士、藤井聡太四冠(2021年12月時点)のように、AI による深い研究から学びつつも、それを超えた人間的な手を編み出し、自分だけの言葉を紡ぐことができるよう、私たちは日々努力していかなければならない。

* 文例の使用については、学生から承諾を得ています。

おすすめの研究ツール:フィールドワーカー編

臺丸谷美幸(水産大学校)

今回「おすすめの研究ツール」というテーマで、エッセイの依頼を頂いた時、さほど有益な情報提供ができないのではと悩んだ。そこで今回は少し視点を変えて、私がフィールド調査時に利用してきた研究ツールについて紹介したい。私はアジア系アメリカ人史を専門としており、定期的にインタビュー調査を実施してきた。研究テーマは日系アメリカ人による朝鮮戦争期(1950-1953年)の従軍であり、その歴史的解明と、強制立ち退き・収容以後、日系アメリカ人たちがアメリカ合衆国社会へ(再)参入した際に、この従軍がもたらした影響について考察している。2008年秋からコロナ禍以前の2019年秋まで、10年以上に渡って日系アメリカ人二世の退役軍人を調査対象とし、インタビュー調査を行ってきた。対象地域はカリフォルニア州で、ロサンゼルス、サンフランシスコ、サンノゼ、サクラメントなどで実施してきた。毎回2週間から4週間程度、年に1~2回のペースで行った。

インタビュー調査の実施方法



[写真 1]

インタビュー時に使用するツールは極めて簡易である。筆記用具、オーディオ・レコーダー (SONY ステレオ IC レコーダー ICD-SX2000、2016 年発売)、小型軽量のデジタルカメラ (Cannon IXY200、2017 年発売)を持参している[写真1]。オーディオ・レコーダーは現在使用している SONY 製で 4 台(代)目である[写真 2]。年々使い勝手が良くなり、操作もボタン一つで済む手軽さが気に入っている。音声の質も十分である。デジタルカメラも必携で、調査対象者の写真撮影の他にも、例えば二世ウィークなどのイベント参加時や、図書館での文書資料の記録にも活用できる。またインタビュー調査には、調査対象者との細かな連絡が必要になるため、スマートフォンの利用も欠かせない。調査の早い時期から現地の製品を調達している(現在は T Mobile 社販売 LG-K10 を使用。2016 年発売)。加えて海外でフィールドワークを単独で行う際は、自身の身の安全を確保することも大切である。Uber や Lyft のアプリを事前にスマホにインストールしておけば、比較的安価な料金で、どこへでも行くことができる。米国で運転ができない私にとって、自家用車移動が前提のロサンゼルスなどの地域では、スマホは安全面でも移動手段の確保のためにも、もはや欠かせない。



[写真 2:左から旧→新]

インタビューデータの整理

この数年で劇的に変わったのは、調査終了後のインタビューの書き起こしにかかる労力と作業時間である。otter.ai (<https://otter.ai/>) のウェブサイトへ録音した音声データをアップロードすれば、AI がわずか数分から数十分で、ある程度の精度で自動的に書き起こしをしてくれる。あとは音声を聞き直して AI の「聞き間違い」を修正するだけである。一回のインタビューが時には 3 時間以上を超えることもあり、実はこの 10 年間で撮り溜めたままの音声データも少なくない。otter.ai のおかげで、データ処理が劇的に早くなり、過去のデータの整理も容易となった。以前は書き起こしの業者に依頼するか、音声認識ソフトであるドラゴンスピーチ(ニュアンス社)や、フットペダル(INFINITY Foot Control)などを駆使して自力で書き起こしをしていた[写真 3]。現在利用している音声編集ソフトは NCH Software (<https://www.nchsoftware.com/jp/index.html>) の Wave Pad である。この音声編集ソフトは高度な編集が可能で、例えばカフェや屋外で録った際に入ったノイズなども簡単に除去でき、お薦めである。

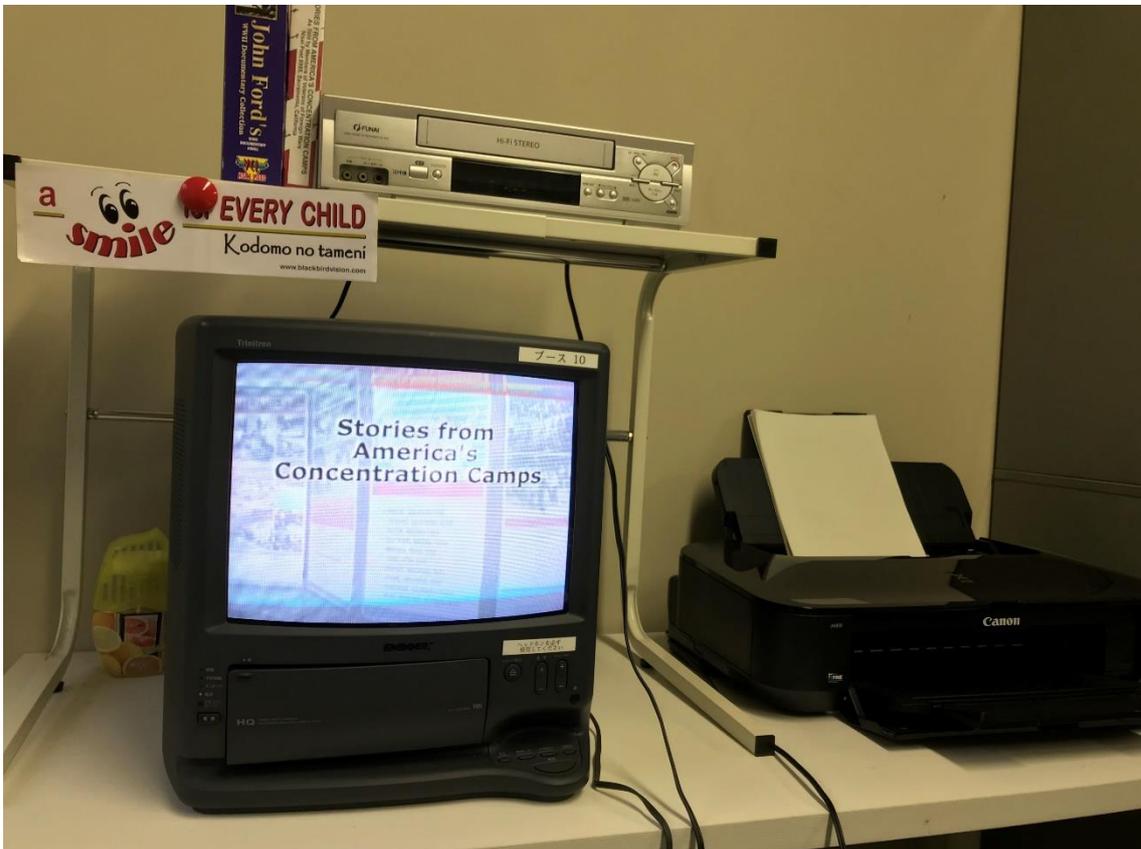


[写真 3]

新旧ツールの併用

調査においては、先端のテクノロジーだけでなく、昔からのメディア、通信ツールもやはり重要である。調査対象者は90歳前後の高齢者のため、Eメールを使用しない人も多い。手紙や電話は今も重要な連絡手段である。またビデオも未だ現役のメディアツールである。調査対象者から20～30年以上前のビデオテープを資料として譲り受けることも多い。近年ではビデオデッキの入手も困難となっているが、幸い所属校図書館の厚意により、ビデオデッキと投影用のアナログテレビを研究室に借与、設置できている[写真4]。

現在は新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、海外でのインタビュー調査は全面的にストップしている。今後さらにコロナ禍が長期化すれば、Zoom や Google Meet などのビデオ通話システムを活用したオンラインインタビューなども検討する必要があるだろう。



[写真4]

事務局だより

<新入会員の紹介> (敬称略) 志賀俊介(成蹊大学)
遠藤 緑(鳥取短期大学)

<会費納入のお願い> いつも会員の皆様には、会費を納入いただきましてありがとうございます。
AAJA Journal No.26 を送付の際に、振込用紙を同封させていただいております。もし、未納の方がいらっしゃいましたら、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

<住所等変更について> 住所、所属、メールアドレス等に変更がありましたら、ご面倒ですが、事務局名簿担当の深井氏までメールでお知らせいただけますようお願い申し上げます。

michifukai@hotmail.com

<*AAJA Journal* バックナンバー購入のお願い> *AAJA Journal* バックナンバー(在庫僅少のNo.1を除く)を1部1,000円でお送りしています。会費納入の際に、ご希望の号と冊数を振込用紙の「通信欄」にお書きいただくと簡単です。

<ジャーナルの執筆者負担> ジャーナルの投稿論文掲載には、従来から、執筆者負担をお願いしています。負担金額に応じてバックナンバーをお送りしています。最低額10,000円(1,000円×10部)以上をお願いしておりますので、お忘れなくお送りくださいますよう重ねてお願ひ申し上げます。

☆会費・執筆者負担等の振込先は以下の通りです(振込料金は振込者負担となります)。

[郵便振替口座番号 01180-1-75183 加入者名 アジア系アメリカ文学会]

アジア系アメリカ文学会
〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1
神戸大学人文学研究科山本秀行研究室内
TEL&FAX: 078-803-5543

AAJA NEWS No.59 2021年12月23日
編集担当: 渡邊真理香